[COMMUNION]
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

東京教区時報［ペンテコステ号］
コミュニオン

第５１号
（通巻１２８６号）
2019年６月９日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

〈ペンテコステメッセージ〉

目覚めさせてください

司祭　フランシス　下条　裕章

ほかの弟子たちが主イエスとの再会を果たしたご復活の日、トマスはそこに居ませんでした。彼は「あの方の手に釘の跡を見、この指をその釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」（ヨハネ20：25）と断言します。するとそこに、その言葉を聞いていた主イエスが現れて、その手とわき腹を示されたのです。トマスにとって復活はこの上なく大きな喜びと、恥じ入る思いを自らに深く刻むものであったと思います。

でも彼のそんな言い様や発想はその時たまたま起こったものではなさそうです。「最後の晩餐」の食事の席でも、「わたしがどこへ行くのか、その道をあなたがたは知っている。」（ヨハネ14：4）と励ましと希望を語ろうとするイエスに向かって、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちにはわかりません。どうしてその道を知ることができるでしょうか。」（同14：5）と言ってのけました。時に、わたしはこんなトマスの生真面目さ（？）に共感を覚えます。日々の生活の中で、また悩みや困難に直面したとき特に。目に見えるもの、手で触れることができる根拠がなければ何を信じることも、どう決断することもできないと。

復活から聖霊降臨までの出来事は、まさにそんなパニックに陥るわたしたちに新しい視界を啓く出来事でした。

ユダヤ人を恐れてひきこもる弟子たちに復活の姿を現されたイエスは、彼らに平和の挨拶を送り、息を吹きかけられました。そして最後に弟子たちが見たイエスの姿は、彼らを祝福しつつ天に昇られ、雲間に隠れてゆく姿でした。

この一連の出来事の中に、主イエスはわたしたちの進み方を示されます。この世界の中で右往左往するのではなく、新しい道に進もうとする思いと言ったらよいでしょうか。

それこそトマスの問いを通して主が示してくださった、わたしたちを決して迷わせることのない道筋。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれもわたしの父のもとに行くことはできない。」（ヨハネ14：6）と言われたイエスに従うという決断に生きることと言えるでしょう。

吹きかけられたイエスさまの命の息を受けたわたしたちは、心新たに生きはじめるばかりではなく、わたしたちが思いもよらなかった新しい生き方や在り方に目覚めてゆくのです。そう、道そのものである主イエスに従おうとするわたしには、それまで思いもよらなかった、地上に描かれた道でなく、地から天に続く道さえも開かれているのですから。

「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」（ヨハネ8：31～32）聖霊は、わたしたちを、そしてわたしたちの教会を、主イエスにあって解き放ち自由にし、新しいあり方に目覚めさせてくださいます。

聖金曜日（受苦日）説教（要旨）

「十字架上の七聖語」（一）

主教　髙橋　宏幸
聖アンデレ主教座聖堂

●はじめに

使徒聖パウロは、コリントの信徒への手紙の中で「今は、私たちは神様を、あたかも鏡の中でおぼろげに見ているけれどもいつの日か、必ず顔と顔とを合わせて相まみえることになろう」と語っているように、キリスト教信仰において重要なテーマの一つは「神様を見る」ということです。それは言葉を換えれば「イエス様のご生涯に触れる」またパウロの言う「キリストと一つになる」「キリストを着る、身にまとう」ということでもあります。

昔からキリスト者たちは真剣にそのことを信仰生活の柱、基本としてきました。そこで具体的に生み出されたのが「巡礼」です。イエス様の生まれた場所、歩かれた道などを自分も、その手で、足で、目で、肌で感じようというのが「巡礼」です。

教会の礼拝に携わるということは、まさにイエス様と一緒に、イエス様のご生涯を歩み、それによって「神様を見る」ということに近づく信仰の業そのものなのです。

今から3時間、「イエス様の十字架上の七聖語」を聴き、祈りを捧げながらイエス様のご生涯のクライマックスを、21世紀の東京で辿ってまいりましょう。

そこで申し上げておきたい事は、イエス様が十字架につけられた時、人々はどう見ていたのか、ローマ総督、兵士、群衆たちが様々なことを言っていますが、その中で主題にしたい言葉があります。それは、「他人は救ったが、自分は救えない」という、イエス様への侮辱の言葉です。しかし、ある意味、これ程イエス様のご生涯を、心を、生き様を的確に言い表している言葉はありません。まさにイエス様は「神様のために」「人びとのために」を貫き、その事を記しているのが聖書です。

ヨハネによる福音書でイエス様は最後の晩餐の時、「私がこれらの事をするのは、或いはこの世に来たのは、神様の御心によるのだ。そして、神様の御心とは、人々を罪から救うことなのである」と言っています。つまりご自分の名誉、名声、功徳のためということは何一つ語られていません。

「他人は救ったが、自分は救えない」という言葉を心に留め、また根底に携えながら、この礼拝を捧げてまいりましょう。

✝第一の御言葉

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」

赦しは、信仰生活にとって大きなテーマです。

神様による赦し、イエス様が注がれる赦しとは如何なるものか絶えず問い続けなければなりません。

ここでは特に「自分が何をしているのか知らないのです」だから「赦してあげてください」となっていますが、実際、人々は何をしているかは知っていたはずです。ではイエス様の言う「何をしているのか知らない」とはどういう意味でしょうか。それは、自分たちが十字架につけた方は「誰」か、自分たちにとって如何なるお方なのか、知らなかったということなのでしょう。

私たちにとって、この「知らない」「知ろうとしない」ということ程、ある意味恐ろしいことはありません。とりわけ、本来人との関わりの中でしか生きられない、人との関わりの中でこそ豊かにされていくはずの人間にとって、周りにいる人たちや、周りで起こっている出来事が見えない、分からない、知らないとなった時、それは私たちにとって「命の危機」「信仰の危機」「霊性の危機」なのです。

「ラザロと金持ち」のたとえ話にあるように、金持ちは門前にいるラザロが見えていませんでした。結果、金持ちは黄泉の国に行くことになります。それこそが「命の危機」なのです。

イエス様のご生涯をなぞるというのは、イエス様になったつもりでなぞるのではありません。イエス様を知ろう、見ようと願う一人ひとり、イエス様を取り囲む一人としてなぞるのです。それは有名な黒人霊歌にあるように「彼らが主を十字架に磔にした時、お前はどこにいたのか」に通じます。

「磔にされた方がどなたなのか本当に知っていたのか？」このことを一つの問いとして思い巡らしたいと思います。

しかし同時に、「父よ、彼らをお赦しください」という素晴らしい救いも備えられています。

私たちもイエス様のことを本当に知っているとはいえません、けれども、そういう私たちを神様は認め、受け止め、包み込もうとしてくださいます。だからこそ、そういう神様の思いを本当に知っているのか？という問いを受け続けなければなりま

せん。イエス様とは自分にとってどういうお方なのか、この「巡礼」の中で黙想したいと思います。

✝第二の御言葉

「はっきり言っておく、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」

キリスト教の大事なテーマは「命」です。聖書は神様が人をお創りになったと記していますが、それは全てにおいて神様の御心において命を授けられたことを示しています。

5世紀初頭の神学者であり司教のヒュッポのアウグスチヌスはその著作「神の国」の中で、「神様は全てであられる。私たちは神様の外側に居ることはできないのだ。仮に神様をあちら側において、ああでも無い、こうでも無いと言うなら、神様が全てであるということは否定されてしまう」。しかし、「神様が全てで在られると言う時、私たちも全てであられる神様の中に居るのだ」と述べ、信仰の核としています。

「神様が命を与え、授けてくださっている」というのは、神様はご自身の中に、私を、私たちを生かしてくださっている、そういう恵みの中にこそ「神様が人間をお創りになった」ということが言えるのです。

「赦し」ということをシンプルに言えば、「受け入れること」「受け止めること」と言えます。それは、まさしく神様が私たちの命を、ご自身の中に認めてくださっているということです。

ところがその一方で、神様の中に置かれている、受け入れていただいていることを、人間が都合よく動かそうとしたり、そこから離れようとしてきました。それは「アダムとイブ」や「バベルの塔」の話が示すように、神様のようになろうとすること、まさに「罪」の問題で、それは生きながら死ぬことを意味します。

十字架上の聖語に戻りますと、罪を犯した者が「イエスよ、あなたが御国においでになる時に、私を思い出してください」と言います。神様から命を授かり、神様の中で生かされて来たにも拘わらず、この男は十字架に磔にされています。しかし本来、あなたの中にいるはずの私をどうか思い出してください、この「思い出してください」とは既に一つの深い祈りです。

だからこそ、イエス様もすぐに「今日、あなたは私と一緒にパラダイスにいる」すなわち「あなたの存在は、神さまに認められているのだよ」「神様という全ての中に、あなたも居るのだよ」という約束の言葉で応えるのです。

✝第三の御言葉

「婦人よ、御覧なさい、あなたの子です」

「見なさい、あなたの母です」

聖書は、神様と人との間にどのような約束が交わされ、人間が如何にそれに応えていこうとするのかが基本となっています。そして信仰とはイエス様の言葉を聴いて、それを受け止め、噛み締め、力や指針、糧としてイエス様に従うことです。しかし、時にその言葉は厳しく、また冷たく響くこともあります。

ここでは「婦人よ」と言われるが、血縁関係に対して、ある種の否定的な響きすら感じられます。事実、マリアに対して「あなたの傍にいるこの若者は、あなたの息子になる人ですよ」と言われ、若い弟子に向かっては「この方が、あなたの母となる方なのだよ」と言われます。

イエス様がマリアとヨハネに向かい、そのように言われた時、心中には計り知れないほど深く、豊かで特別な関係を打ち立てていって欲しいとの願いが込められていました。

ここに「自分の十字架を背負って従いなさい」という御言葉を絡めてみると、「自分の十字架」というだけに、私の人生の苦しみ、私の欠点、私の惨めさといった具合に、「私の」を頭につけて、それが十字架であると受け止めてきました。もちろん、それも否定はしません。しかしイエス様は何の罪もなく十字架を背負います。それはイエス様の落ち度、苦しみ、恥、惨めさ、貧しさなどそのいずれでも無かったはずです。

そうではなく、他人の問題、他人の苦しみ、他人の涙や傷。それこそが、イエス様が「あなたたちも十字架を負って、私のように歩んでほしい」と言われた時の十字架ではないでしょうか。

では私の重荷はどうなるのでしょうか、おそらく「あなたが誰かの重荷を担い合おうとする時、あなたの重荷は誰かが担ってくれる」ということではないでしょうか。そして、それがキリスト教のいう「交わり」の中身であり、イエス様のように十字架の道を歩むということの真意です。

担う相手、担ってくれる誰かがいるということは、喜ばしく感謝すべきことです。イエス様は、母マリアと弟子のヨハネにそのような互いに背負い合う関わりを望み、最も信頼できる二人に託したのではないでしょうか。

（次号に続く）

立教大学GFS活動の今
子ども達との出会い　～共に成長する～

私たち立教大学GFSが現在メインとしている子どもを対象とした活動の一つ目は、池袋聖公会伝道所で行っている月2回の学習支援です。ビルマ出身のご両親を持つ小学生3兄弟の宿題を見たり、正しい日本語を学ぶためにいらっしゃる先生がスムーズに指導を進められるようサポートをしている。学習支援というより、大学生という比較的歳が近い大学生を身近に感じてもらい、甘えられる存在となることで、日頃感じているかもしれない諸々の緊張感やストレスを和らげられる時間を提供することや、自身の将来や可能性をイメージしやすくなってくれれば、という想いで子ども達と向き合っている。しかし、彼らのバックグラウンドや現状・ご両親の心配事に対して伺いづらいという気持ちから、しっかりと耳を傾ける機会を逸し続けている。成長し環境が変わっていく子ども達が充実した生活を送ることが出来るよう、子ども達の表情や言動・ご両親の気持ちにもより注意して子ども達の成長を見守りたい。

次に、清瀬聖母教会では月3回子ども達と一緒に遊んだり年間行事に纏わる工作を手伝うだけでなく、そのうち1回は子ども礼拝を担当している。小さい頃から教会に通う彼らは、私たちよりも知っていることが実際多いということもあるため、子ども達のことを頼りにすることや感謝することを意識して、子ども達が自主的にヤリガイを感じられることで成長してくれることを意識している。

月島聖公会では、福島から避難してきた子ども達と隔月で一緒に遊んでいる。子ども達がいかに多くのストレスを抱えているのか、また同じ境遇の友達と一緒に過ごす時間がどれほど大切かは想像に難くないため、参加する全ての子ども達が楽しみ満足して帰ることが出来るよう、安全面だけでなく小さな言動に注意しトラブルが起きないよう配慮している。子ども達だけでなく、子ども達が遊んでいる間に保護者同士で様々な課題について不安を吐露し共有することが保護者のリフレッシュにも繋がるという意味でも大きな意義を持つと思う。

たまに会う私たちがどれほど彼らの役に立っているは、正直分からない。しかし、子ども達が笑顔で過ごすことが出来るよう考え活動に取り組むことが私たちの使命だと考え、今後も向き合っていきたいと思う。

新しい翻訳聖書について

司祭　菅原　裕治

２０１８年12月に、『聖書協会共同訳』が刊行されました。翻訳担当者として一言お話ししたいと思います。

近現代日本における聖書の翻訳は、１８８７年に『文語訳』、１９１７年にその新約部分を改訳した『聖書文語訳』、１９５５年に『聖書口語訳』、１９８７年の『聖書新共同訳』（「新」とあるのは１９７８年に新約部分のみの『共同訳』が出版されたからです）と約30年ごとになされています。『口語訳』までは、翻訳・編集者と対象読者が主にプロテスタントの教会でしたが、『共同訳』以降その名の通りカトリック教会が加わりました。

30年という間隔は、言語・神学などを含めた時代の変化にあわせてのことですが、今回の翻訳は、次のような特徴があります。カトリックとプロテスタント18の教派・団体が参加し、より教会の共同作業性が高まっていること、礼拝での朗読を重視し、格調高く美しい日本語を目指していること、20世紀後半からの聖書学の研究成果を生かすことです。

これらことから、原典を一人あるいは数人の専門家が翻訳して、それを編集するという従来の作業ではなく、より多くの方々が過程に加わることとなりました。その過程を簡単に説明しますと、一つの文書の原典翻訳者（わたしの担当はここです）と日本語の専門家とがチームを組み、より良い日本語を選びながら翻訳を試み、それを他の文書の方々と精査しあい、作成された翻訳文を、朗読担当の方が朗読し修正し、全体の訳語の調和や統一、差別語・不快語などの事柄を編集委員会で検討・修正し、パイロット版を出版し、様々な分野から意見を求めて、検討・修正し、最終的な完成版に至るというものでした。これらの過程を経た最終版は、原典担当者から言えば、この文書の最善の翻訳だと思ったものとは、異なっているというのが実感です。

今回、翻訳に参加させていただき、特に印象に残ったこととして、一つに、多様性を認めることの大切さと困難さは、聖書翻訳という作業にも大きく関係するということがあります。逆に言えば、それだけ懸命にそのことに取り組んだ結果が、今回の聖書に見られるということです。もう一つは、標準語で翻訳するという事柄にある壁です。誰にでも伝わる標準語は、誰にとっても生きた言葉ではありません。しかし、このことも逆に考えれば、だからこそ、聖書は礼拝で朗読され、誰かと共に読むことが常に大切なのです。

30年後の聖書翻訳は、もう紙媒体での刊行ではない可能性が高いです。それでも、読む人・聞く人に、慰めと希望を与える神の言葉であることは変わりないと思います。

［司祭のこの一冊］

『サビールの祈り - パレスチナ解放の神学』

ナイム・アティーク著

岩城 聰 訳

教文館２０１９年刊

司祭　須賀　義和

２０１０年にエルサレム教区協働委員会主催の「新しい聖地旅行」に参加した時、目にしたのは高さ８メートルの何キロも続く分離壁でした。生活道路が分断され、何キロも遠回りして検問を通る生活が日常になっていました。国家による組織的な住宅破壊や入植政策など、「水と土地の問題」を、聖書の言葉を持ち出すことによって正当化しようとしています。

神様は本当に聖地をユダヤ人にのみ与え、他の人々の絶滅を求めて不正義を許しているのだろうか。この本では、パレスチナに生きるキリスト者としてユダヤ人とアラブ人が共に生きるために聖書に誠実に向かい合い、正義・平和・和解のために被害者だけでなく加害者も共に解放される神学を提示しています。

著者であるナイム・アティーク司祭は１９４８年５月15日のナクバ（大災厄）によって平穏に暮らしていた家を追われた大勢のパレスチナ人のひとりです。司祭はユダヤ民族主義に基づいた「土地習得の正当化」に「否」を宣言します。レビ記やサムエル記にある排他的な「聖絶」の思想はすでに、エゼキエル書47：21～23やヨナ書など旧約聖書の中ですでに克服されていると語ります。」そして聖書を読み解く解釈のカギは「神の愛と隣人に対する愛」でありイエス・キリストこそがカギであるとしています。イエスが地上の生涯を通して排他性を拒絶したように、神の言葉はすべての人々に向けられているのであり、パレスチナに正義が実行されることを求めます。

「パレスチナの解放の神学」について語る本著ではありますが、私たちがさまざまな問題に立ち止まらざるを得ないとき、戻るべき場所を明確に示しているという点では、普遍的な価値を持つ本だと思います。

東京教区アルバム（3月～5月）

清瀬聖母教会　大森明彦司祭　4/7

神田キリスト教会　井口諭司祭　4/21

牧　師　任　命　式

インマヌエル新生教会　卓志雄司祭　5/５

聖アンデレ教会　下条裕章司祭　4/14

東京聖マルチン伝道所
感謝礼拝　3/3

聖公会神学院入学式　4/8

下町こども
ピクニック
4/27
葛西臨海公園

東京教区中高生会

私たちの教会［３６］

ようこそ浅草聖ヨハネ教会へ

１８７６年（明治９年）浅草の地でＣＭウイリアムズ監督（主教）のもと、ＷＢクーパー宣教師によって浅草伝道が開始され、本年は１４３周年になります。そして１８９１年黒船町に教会堂が建設、「浅草聖ヨハネ教会」と命名され、１２８周年の時を迎えております。

関東大震災の被災、区画整理などの変遷の後現在の地に至りました。初代牧師清田海一郎司祭から数え現在の管理牧師中村淳司祭は16代目となります。

１９４５年３月の東京大空襲による教会堂、牧師館焼失で尊い教会員13名の爆死（牧師夫人、子息含む）の悲しい歴史があります。その意味に於いても「平和」の二文字を重く受け止めている教会です。

２００６年に東京都の有形文化財登録を受け、宣教の重みを一層深く感じています。

１９７５年心臓に疾患のあるお子様たちの保育、学び、交流の場としての「こばと園」がスタートし、現在も週２回（火、金）開かれております。他ホールを、定期的にゴスペル、コーラスなどグループの練習の場として提供しています。

２０００年からスタートした毎主日の（近隣の祭事、隅田川花火、東京マラソン、バザーを除く）日曜給食活動も19年目を迎えております。様々なトラブルを経ましたが、現在は静かに毎回２００食前後の炊き込みご飯を配食。平和の和の禾の字は、穀物の意味。すべての方々の口に平等に食べ物が入ること。それが平和の原点ではないでしょうか？又ヨハネ教会伝統のフェローシップランチも工夫を凝らして続行。食卓を囲む交流も健在です。

３年間空き家となっていた牧師館に、本年４月から佐久間恵子執事が入居して下さり、住人を得た住居は爽やかな風を運んでいます。

今、蔵前辺りは新しい波が押し寄せ、ホテル、カフェ、レストラン、おしゃれなショップなどが増え、様変わりしています。是非蔵前Ｍａｐを参考にぐるりと巡り楽しい発見をしてみてください！

外国の方、通りすがりの方々が十字架に目を止め、立ち寄って祈りを捧げられる姿も度々目にします。当教会も高齢化、信徒数の減など問題山積です。一人一人決して完璧でなく、名もない者ではあっても、神様は決して忘れることなく覚えていて下さる。そのことを信じてそれぞれの出来る範囲での奉仕を続けています。夢をもって……。（高津　寿江）

《信徒リレーエッセイ》

神様の差配に思う

月島聖公会　小川　昌之

聖ルカ保育園の保育室を使用して、信徒数10名強で礼拝を守ってきた月島聖公会は、建替えないと危険と言われながら、資金は６００万円という教会でした。皆さんのご支援もあり、新聖堂・新園舎が与えられて９年目を迎えます。その聖別式が行われたのは、奇しくも東北大地震の１週間前でした。大地震が襲った午後２時40分頃は保育園のお昼寝タイムでしたから、誠に幸いなことでした。

神様の『差配』が有ったとしか思えません。

私たちは、祈祷書１７２頁で「すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主に献げたのです」、祈祷書１８１頁で「わたしたちは多くいても、一つの体です」と毎週唱えます。この二つの聖句を心に、月島聖公会が教区の『新しい宣教の拠点』として用いられますように心掛けて活動していきたいと思います。神の助けによって…。

地域と共に生きる教会
東京聖三一教会

吉松 英美

今日にも桜が開花するという3月20日（水）、関晴子さん（聖愛教会）のピアノ演奏があると聞いて、妻と一緒に東京聖三一教会へ出かけた。2015年以来続いている「ランチタイムコンサート」である。開演間近かになると続々と人が集まり、急遽パイプ椅子を補充するほどの盛況で、広いホールがいっぱいになった。主催者の話では来場者102人、このうち7割が地域の人たちだという。

地域とのコラボレーション

今年から奇数月は近隣の代沢中町会、世田谷区社会福祉協議会（社協）と一緒に開催することになった。

メンデルスゾーンの「春の歌・無言歌集より」など6曲が演奏された。

関さんのピアノは、優しい人柄がそのまま表現される。関さんは「音符が音に変わる時、音楽の言葉となって私たちの心に伝わります」とプログラムに書いている。阪神淡路大震災支援コンサートは10回に及ぶ。どれほど多くの被災者が関さんの音楽に悲しみを癒され、生きる勇気を与えられたことか。今回は『関さん効果』もあったのでは」という人もいた。

演奏会は、関さんの後輩である中島由紀さんが、ショパンの「バラード・No4」を力強く弾いて幕を閉じた。

助け合う社会をめざして

当日司会を担当した同教会の加藤啓子さんによると、中町会などとのコラボが実現したのは、昨年代沢地区の「ささえあい講座」に同教会の小林深夏さんと参加して、地域の人々が、集まる場所を求めていることを知ったのがきっかけという。

社協、地域包括支援センター（あんしんすこやか）、町作りセンターの3者が、高齢化で一人暮らしが増えるなか、お互いに知り合い、いざという時に助け合う社会にしようと協力しあっているのを知った。その後、社協と話し合い、地域の人々の願いと教会の地域への働きかけがどのように結びつくかを検討してきた。

昨年9月、コンサートの後のティータイムに社協と「あんすこ」の相談ブースを設置した。さらに社協の仲立ちで代沢中町会の人を紹介された。コンサートの予告のチラシの裏面に地域カフェの案内を入れ、町内会の回覧板に添付してもらうことにした。社協のホームページにも掲載された。こうして今年から冒頭のようなコラボが実現した。

演奏会が終わると、代沢中町会は「ガーデン・カフェ」を開店し、社協は「相談コーナー」を開いて相談に応じていた。中町会の正副会長や社協の関係者も来て、意気込みを感じさせた。

広い庭ではミニバザーも開かれ、衣類や食器が並んだ。試着する女性もいた。

演奏会後も多くの人が残って、カフェを楽しみ、歓談していたのが印象に残る。

来て、見て、知ってもらう

この地域には、「代沢芸術祭」が2016年から行われており、聖三一教会も歌やオルガン演奏会を開催して例年参加している。それが下地にもなっている。

加藤さんは「これまで教会が地域に何かをしている」という錯覚があったという。しかし、実際には教会が地域に支えられてきたのではないかという。「コンサートだけで終わっていたら、気のつかなかったことが沢山ある。コンサートを通じて、地域の人たちと交わるのは、楽しい」と加藤さんは相好をくずす。

こうした活動を通じて、教会が地域の人たちに理解され、親しまれていく。まずは地域の人たちに「来て、見て、知ってもらうこと」が大事ではないだろうか。

（聖オルバン教会信徒）

◇　◇　◇

次回 夏号

7月21日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（四十三）

1. 神学者

信　徒「先生は、いま研究している学問で日本でもトップだそうですね」

神学者「まあ、そうだけど、たいしたことじゃないよ」

信　徒「そんな謙遜しなくてもいいですよ、凄いことじゃないですか」

神学者「違うんだ、日本でこの研究をしているのは私しかいないんだよ」

2. 人それぞれの望み

牧　師「もし、イエス様がここにいたら、あなたは何を望みますか」

大道芸人「そうですねえ、まずは水の上を歩く方法を教えてほしいですね」

食いしん坊「私はパンを増やす方法を知りたいです」

お酒好き「もちろん、水をぶどう酒に変える方法だよ」

3. なりたくない職業

信徒「先生は、子どもの時は何になりたかったんですか」

牧師「うーん・・・ただ少なくとも牧師だけにはなりたくなかったなあ」

信徒「神さまは、そんな風になりたくない人こそ牧師に召し出すんですよね」

牧師「そうと知っていたら、牧師になりたいと思えばよかったよ」